

「ブックレビュー・セミナー」の試み —教職課程の学生にどのような本を推薦したらよいか—

岡本 哲雄*・富岡 勝**

はじめに

2010年5月より、教職課程の学生に推薦する図書について紹介し合う、教職教育部を中心とした教員が自由に参加できる研究会として「ブックレビュー・セミナー」が始まり、約1年間で8回開催された。この文章は、開催を呼びかけた「世話人」の岡本・富岡の文責で「このブックレビュー・セミナーが何の目的で始まったのか」を中心に、活動記録を残すことを目的としている。

最初に、教職教育部の発行物のなかに、教職教育部内の具体的な活動記録を残すことの意義について簡単に触れておきたい。

教職教育部内の業務も年々、増加の一途を辿っている。例えば前期は、4月は各種ガイダンスや履修相談、5月は介護等体験・教育実習・スクールインターンシップ等の準備と教員採用試験の面接対策、6月は教育実習、7月は教員採用試験の直前対策や教員免許更新講習の準備などが授業と並行して実施されていく。教職教育部の教員にとっては、特に4月からの約半年間は、一瞬で過ぎ去っていくように思われる。そうした年月が十年間、二十年間、三十年間と過ぎていくうちに、「各時期の近畿大学で教員養成のために具体的にどのような取り組みが行われていたのか」という記憶があいまいになっていくだろう。現に、教職教育部発足は1989年であり、わずか二十数年間しか経っていないが、当時の教員はすでに退職しているため、発足当初の教職教育部内の具体的な取り組みについて知ることは難しくなっている。

しかし時々の教職課程の担当教員が「どのような理由から、何に、どのように取り組みんだのか」という具体的な記録を残していくことは、その取り組みが成功したか否かにかかわらず、後年の教職課程にとっても何らかの参考資料になるのではないか。例えば、本学の教員養成の

* 近畿大学教職教育部教授

** 近畿大学教職教育部准教授

特徴の一つであると思われる教員採用試験対策の「スタート講座」「模擬面接」「論作文対策Eメール講座」や、各学部と教職教育部との連携についての具体的な記録が残っていれば、「21世紀の初めの時期に、どのような理由から、どのような工夫をしながら採用試験対策が行われていたか」といったことを後年にある程度伝えられるのではないかと考える。さらに、「ブックレビュー・セミナー」のように、制度化されていない活動の経験は、会議資料や事務資料などには記録されないため、記録を残すことの意義は更に大きい。

また具体的な活動記録を残し、発行物を通して公開していくことは、後年の関係者に対してだけでなく、学外の方々への「説明責任」としても意味があるといえる。

このように考えると、教職教育部の発行物のなかに具体的な活動記録を残し、公開していくということは一定の意義があるのではないかと考える。

以上がこの記録を残そうとした理由である。

1. ブックレビュー・セミナーの開始と第8回までの経緯

ブックレビュー・セミナーは、教職教育部を中心とした大学教員の自主的な研究会として2010年5月に第1回が実施され、2011年5月まで計8回行われた。

趣意書

第1回実施に際しての2010年4月1日付けの呼びかけ文「『ブックレビュー・セミナー』を始めませんか(趣意書)」の主な内容は以下の通りである。

新年度を迎えご多忙かと思いますが、研究会のお誘いをさせていただきます。今年度から導入された「履修カルテ」に「教職に関して授業以外に読んだ書籍」の欄があります。学生によりよい本を推薦していくことがこれまで以上に求められていきますが、「どんな本があるか」「どのような意味で推薦できるか」といったことを教員間で研究しておくことは有意義だと思われます。

また、共通の本をもとに研究分野を越えて話し合い、学び合うことができるので、懇話会や懇親会とは一味ちがった交流になるのではないかと考えました。

そこで、教職課程の学生に推薦する図書、もしくは教員間で学び合うために有意義と思われる図書について情報交換をする標記のような研究会を毎月1回、昼休みの30分を使っ

「ブックレビュー・セミナー」の試み—教職課程の学生にどのような本を推薦したらよいか—

で開催していいかどうか、と考えました。以下のような趣旨にご賛同いただける先生は、ぜひお気軽にいらしてください。

1. 目的

- 学生や同僚に推薦したい本を紹介し合い、教員間で学び合う。
- 共通の本をめぐる意見交換することで実務以外での教員間の交流を促進する。

2. 実施方法

〈参加者〉

参加者は教職教育部内の希望者とする（興味のある回のみ参加も可）。参加者は課題図書ができるだけ事前に読んでおく（ただし、未読でも参加可能）。参加希望者は、開催日1週間までに、文書またはメールで世話人へ連絡する。非常勤講師や他学部教員から参加希望があれば、世話人で協議する。

〈図書〉

教職課程の学生に資すると思われる図書もしくは教員間で学び合うために有意義と思われる図書を、近年刊行の入手しやすい本を中心に選択し、毎月1冊ずつとりあげる。教員養成をテーマとする図書はもちろん、各教科領域に関する図書や教育一般、あるいは現代社会一般に関するものでも、有意義と思われる図書を選択して、どのような意味で推薦できるのか、学び合えるのかを研究会で意見交流する。本は各自購入しておく（Amazon.comなどですぐに入手可能）。

〈日時〉

多忙な中でも継続していくことに意味があるので、弁当持参で昼休みの30分間（報告15分間、ディスカッション15分間）の時間厳守で実施する。毎月1回（原則として第4木曜の12時20分～12時50分）の定例開催を目指す。

〈報告者〉

報告者と課題図書は、参加者からの希望をもとに決定する。報告者は「その本を学生や同僚に推薦したい理由」「その本の概要と簡単な位置づけ」「内容に関して議論したい点（疑問点含む）」などを簡潔に報告し、ディスカッションの導入を行う。

直接の契機—「履修カルテ」

ここに述べているように、ブックレビュー・セミナー開始の直接の契機は、2010年度入学生から導入した「履修カルテ」に「教職に関して授業以外に読んだ書籍」の欄を設けたことにあった。「履修カルテ」は、4年次の「教職実践演習」開設に合わせて、学生が教職課程で学んできたことを振り返るためのツールとして作られたものである。そのため、「履修カルテ」には、教職課程で学んだ授業について記録する欄だけでなく、スクールボランティアの活動や「授業以外によんだ書籍」について学生自身で記録する欄も設けられたのである。

授業以外の読書はあくまでも学生の自主的な活動であるが、教職志望学生に対して読書を奨励する以上、奨励する側である教職課程の教員としても「例えば教員を目指す上でどんな本を推薦したいのか」について、これまで以上に研究を深めておき、もし必要があれば適切なアドバイスができるような準備をしておいてもよいのではないか。こうしたことがブックレビュー・セミナーの直接的なきっかけである。

ただし推薦本の選定というだけなら、自主的な研究会ではなく、教職教育部の教務委員会やFD委員会の業務として実施するという方法もあるかもしれない。また、教職教育部の各教員による図書の推薦は、従来も授業の場で行われてきたことであり、各教員が自らの責任で対応すべきことであるという考え方もできるかもしれない。

しかし、呼びかけ人二名としては、後述する理由、例えば「教員間で学び合う」活動を重視するという理由から、敢えて自主的な研究会としてブックレビュー・セミナーの開催を提案した。

12ヶ月で8回開催

以上のようにして提案したブックレビュー・セミナーは、毎回6名から10名ほどの参加者を得て、以下のような日程と推薦図書により、2011年5月までの間に8回実施された。日常的開催を目指し、授業実施期間に月1回ほどの頻度で開催することが目標としたが、結果としては当初の予定に近い頻度で実施された。

第1回 2010年5月6日 佐藤学著『教師花伝書』(小学館、2009年)

第2回 2010年6月3日 山崎正和著『文明としての教育』(新潮新書、2007年)

第3回 2010年7月8日 向山洋一著『授業の腕をあげる法則』(明治図書、1985年)

「ブックレビュー・セミナー」の試み—教職課程の学生にどのような本を推薦したらよいか—

- 第4回 2010年10月7日 岡本薫著『教師のための「クラス・マネジメント入門」』（日本標準、2008年）
- 第5回 2010年11月18日 山田太一著『親ができるのはほんの少しばかりのこと』（PHP出版、2008年）
- 第6回 2010年12月16日 山田太一・斉藤次郎著・雑誌「子どもとゆく」編集部編『子どもとゆく』（コモンズ、2004年）
- 第7回 2011年1月27日 荻谷夏子『優劣のかなたに 大村はま60のことば』（筑摩書房、2007年）
- 第8回 2011年5月19日 宮本常一『ふるさとの生活』（講談社学術文庫版、1986年（初版1950年））

開催時間

開催時間は30分間程度に設定した。最初の約15分間で各回の報告者による図書紹介を行い、残りを参加者の意見交換にあてることとした。報告者は、図書の内容紹介とともに、「なぜこの本を紹介するのか」「内容に関して意見交換したい点」についても手短かに報告することに申し合わせた。報告者は、最初の2回は呼びかけ人が担当し、第3回からは希望者が担当した。

30分間という短時間での開催を原則としたのは、多忙な時期でもなるべく1ヶ月に1回程度の頻度で定期的に開催することを目指したためであった。実際には議論が盛り上がって30分間を超過することもあったが、30分経過した時点でひとまず終了として、希望者は残って議論を続けるといったかたちをとった。

最初は、「隙間時間の活用ができないか」と考えて、昼休みに開催されたが、授業・教育実習・介護等体験・進路指導の関係で、毎日（!）の昼休みを学生指導にあてている教員もいることがわかり、木曜5時限に各委員会が予定されていない日を探して開催することとした。

参加者・報告者

完全に自由参加の会として開催するため、回ごとに気が向いて都合もつく教員が出席するというスタイルをとり、呼びかけ人以外の固定メンバーは設けなかった。

気軽に多くの教員が参加できるように、その本を入手していなかったり、未読であったりした場合でも遠慮なく参加できるということにした。

紹介する図書の選定は、各回の報告者が自由に行った。箇々の図書の選定理由や意見交換の様子は、機会があれば各報告者が記録を残すかもしれないため詳しく触れないが、結果として、各教員の専門分野や問題意識を反映した選書が行われたようである。

参加者からは、その本に対する疑問点が気軽に出来る事が幾度もあり、結果として、教員同士の自由な意見交換の場としても機能したと思われる。

おもに教職教育部内で参加者を募ったが、1年前に教職教育部から学部へ移籍した教員の参加も見られた。今後、教員養成に関心の高い各学部の教員にも広く呼びかけていくのもよいかも、と考えている。(岡本・富岡)

2. なぜ、「ブックレビュー・セミナー」なのか? 一個人的雑感一

この自主的な研究会を「ブックレビュー・セミナー」と銘打っては始めることにしたのであるが、その際、この名前を提案した「世話人」の一人(岡本)として、この研究会を始めるにあたって心のうちにあった思い、あるいはそれから1年たった今、心のうちにある個人的な思いを言葉にしておこうと思う。ただ、もちろん、ここに述べるのは公式なこの研究会の趣旨(1を参照)というものではなく、その意味で他の参加者に共有してもらいたいから書くということでは決してない。しかしながら、個人的な思いを披歴することが、自ずから個人的な教育観や大学観を言葉にすることにつながるし、それが同じ大学人として、教職課程担当教員として、今後の研究会の在り方や方向性を参加者各位と議論していける契機になればと考える。

大学への絶望と希望

近年、一般的に言って、ますますどの大学においても多忙化が進んでいる。大学が、その教育と研究において社会的責任を有していることは言うまでもないが、その方向性や理念そのものは深く議論されることもなく、眼に見える「効果」や「成果」をあげることに追いつてられ、自ら産業社会の人材養成の下請けを買って出ているようなところがある。その費用対効果を検証するために、そのつどシャドーワークが再生産され、かえって肝心の教育活動や研究活動を圧迫してしまっているのが日本の大学の趨勢であろう。そのような中、私たちは、大学人として、本当に意味のあることをしているのか? 生き残りに躍起になるあまり、近視眼的になって、大学人として本来有すべき長期的・歴史的展望や大局観を失っていないか? 一このような反省は、ようやくあちらこちらから聞こえてこないわけではない。しかしながら、世の

「大学改革」なるものの流れはいまだ変わろうとしない。

近代化の矛盾を近代の論理で繕おうとする、異常に興奮したハイパー・モダンな目的合理主義的「改革」は、企業社会のみならず大学と学校をも覆いつくしてしまった。これがまさに21世紀のニヒリズム（目的を達成する合理性ばかりを評価対象にし、それが根本的に何のためか、何の意味があるのかという問いを隠蔽している状況）を形成している。目的合理主義のすべてが悪いとは言わないが、数値による明示化への根拠のない信仰、PDCA サイクルの神話化など、それは、価値観の分裂と相対化が極限に達したことから生じる存在不安と信頼（相互の関係を阿吽の呼吸で支えていた見えない紐帯）の喪失を、目的合理主義の網の目をより細かくすることで人工的に繕おうという強迫観念に支配された近代社会最後の足掻き（自己矛盾的営為）とも見えてくる。やがてそれは液状化を起こすことが分かっているのだが…。いや、このたびの大震災と津波、それに原発事故は、近代の人間中心主義、近代合理主義一辺倒の在り方を反省せよ、という「最後通告」の様相を帯びているとも思われる。もはや近代への根底的な反省は不可避となったのである。近代の大学の在り方そのものも、これまでのいわゆる「改革」とは別の仕方、根源的に反省を迫られている。

このような現状認識が妥当であるか、大いに議論したいところであるが、いずれにせよ多忙化が進んでいることには誰も異論はないであろう。そのような中、私たちは、むしろ制度化されない形で、まったく非公式に、教職教育部の同僚と教育や研究の面で共に学び合う機会をもてないだろうか。そしてそれが同時に、学生に対する教育活動にも資するものとなることはできないだろうか。そのような思いは、富岡氏同様、私の中にも以前からくすぶっていた。その思いが沸き起こってくるまず第一の理由は、平素の大学の業務の中で、同僚と顔を合わせても、まず、仕事の話しかする余裕がないという現状があるからだ。もちろん、仕事の中に仕事の話をするのは当たり前だし、それ以外の話をするのは不謹慎かもしれない。しかし、私たちは大学教育に携わる教育者であり、同僚との会話の中に、たとえ一瞬でもお互いの教育観を交流させることができるような時間があってもいいのではないか。短時間でもいいから、そのような意味豊かな瞬間に触れるだけで、少しは仕事に対する感覚も変わってくるのではないか。他の異質な教育観に触れることで、私の教育観は揺さぶられ、新たに組み立て直されて鍛えられていく面がある。そのような刺激は、同じ学生の教育に携わる同僚間にこそ、最も必要なことのように思えるからだ。そして、教員の側にそのような雰囲気や文化が出来上がれば、学生もまたそこへ巻き込まれていくだろう。

問いながら学び合う文化のゆくえ

近代の大学の歴史でそれが実現されたことがあったかどうかは別として、兎にも角にも、大学は本来、ファカルティー（教授陣）と学生が共に問いながら学び合う、教育と研究の共同性や自治をその志として抱いていたのであるが、そのような精神的風土が有する人間形成的な意義は、近代の大衆化、そして今日のユニバーサル化へと大学が「進展」してきた中であっては、もはや昔語りにも登場しないのが現状である。したがって、逆に言えば、学び合う共同性が、大学や学校教育の理想であるという立場からすれば、今日の大学や学校教育を巡る状況はまさに絶望的な極限状況であるというしかないのであり、希望の欠片すらないようにも見えてくる。しかし、どんな場合にも、そこに真摯な深い絶望がある限り、何らかの希望が隠れているものである。幸い、教職教育部は、16名（2011年度）からなる少人数のファカルティーである。本学教職教育部には、教職課程そのものの煩雑さに伴う多忙化もあるが、ここではあえて多くを語るまい。私たちが、多忙化の中であって、たとえ少しの時間でも自主的に時間を確保して、義務的ではなく自由な意思に基づいて創造的な意味ある時間を共有できたら、豊かな気分になるのではないか。多忙化の中であえて時間を無理やり作り出して、そのような時間を共有したいという思いで発起人2人は一致したと考えている。もちろん、各教員それぞれには、それぞれの研究活動がある。異分野同士の研究交流も大切である。しかし、どこの大学も似たり寄ったりだとは思いますが、同じ学生の教職教育に携わる教員同士が、内容的に踏み込んで教育観を交換するような時間と場所がないという現状こそが、実はまったく不自然なことなのではないのか、という思いもあった。

さて、繰り返しになるが、以上に述べた雑感も、あくまで個人的なものであり、このセミナーを起ち上げた公的な主旨などというのではない。発起人同士ですら、それぞれが違う思いをもっては始めている面もあるかもしれないが、それはそれでよいのである。少なくとも、参加している者同士がそこで、お互いの人間観や教育観、それに現状認識などを交換し合えることができれば、それに何らかの目に見える「成果」が生じなくとも幸せなことなのではないか。呼びかけて、どのくらいの同僚が参加してくれるかはわからないが、たとえ2人で行うことになっても、自分たちのためにやっていることだから、細々と時間をつくって続けようという覚悟で始まった。しかし、同時に同じような思いをもっている同僚はいるはずであるという確信もどこかにあった気がしているし、いつも、何人もの同僚に自主的に参加していただいていることを、文字通り「有難い」ことだと感謝している。本当にやってよかったと思えるのは、

その時間は少なくともお互い、普段は聞けない話も聞けるし、なかなか話す機会のない話題ができる雰囲気が醸成されつつあるということである。どの程度、お互いの教育観が刺激され、それが自分にどう変化を及ぼしているかということは、もちろん明示できない。ただ、やはり同じ教職教育に携わっていても、それぞれの専門分野が違えば、それぞれの視点から問題が語られ、それを聴いているだけでも発見があるということだ。他の参加者の感想も伺いたいところである。

もちろん、私もそうだが、業務の合間に同僚と話すことはといえば、当たり障りのない世間話やトラブルを起こす学生への愚痴などが主であり、もちろんそれも必要な気がする。しかし、それに終始し続けるだけでは、やがて職場への倦怠感を生み出すことも実感してきた。かといって、飲み会の席で、教育論を戦わせるなどというのも、何か無粋な感じがして、イデオロギー闘争時代のようなアナクロ感が拭い去れず、「団塊」以降の世代にはなじめない。そこで、面と向かって教育論議を戦わすなどという熱いものではなく、何か、共有できる題材を選んで、それを媒介にして、さりげない仕方で思いついた感想を述べ合う、という自然な時間と場所を形成することはできないか。そんな思いはかなり以前からずっとあった。

教育への〈問い〉を〈問い〉として育てるために

そして、互いの自前の教育観を交流させるだけではなく、選定した「触媒」としての書物がそれなりに刺激的な教育観を提起してくれていたら、それに対するお互いの反応自体が、自然な教育観の交感を生じさせてくれるのではなかろうか。またさらには、その題材が、学生たちの発展途上の教育観を刺激し、考えさせ、成長を促すきっかけをつくる可能性があるかどうか—それを教員間で吟味することは、学生に対する教育観をお互いに交流させることにもつながるのである。

実際、学生に良書を選んで示すことは、近年の大学では大変重要なことになっていると感じている。そもそも中世以来の西洋の大学の歴史は、古典との対話を軸とした学問共同体であったことは言うまでもないが、世俗化した20世紀のリベラルアーツ教育の具体的な実践として、かつて、1930—50年代にシカゴ大学学長であったロバート・ハッチンスが構想し、20世紀半ば以降にその影響を受けたモティモア・アドラーが「グレートブックス・セミナー」を立ち上げたことが知られている。学生に西洋の古典を読ませ、それらが提起する人生の重要テーマ（例えば「幸福とは何か?」「自然とは何か?」「政治とは何か?」「職業とは何か?」といった

一義的な答えの出ないテーマ)を日常生活に即して議論するセミナーを構想したのである。古典を咀嚼し、それを現代の日常を生きる学生に示し、身近な事柄と関連づけて議論することは並大抵のことではできない。教員の側の十分な研究が欠かせないからだ。また、そのような試みは、ある場合には文字の読み書きから手ほどきすることさえ必要となる、今日のユニバーサル化した大衆大学の中では、まったく不可能のようにも思える。

しかしながら、もちろん、古典を読むとはいかないまでも、工夫して現代の若者に活字文化を提供する必要があるについては、あちこちで提言されている。伝統が崩壊し、そのうえ、近代の「進歩」信仰が幻想であることが露呈した今日の不確実な意味喪失の時代に、若者たちは、考え方や生き方のモデルを求めているのは確実である。情報化の中で、そのようなモデルは、一見豊富なようで実はかなり陳腐化しており、その質において貧困であるのが現状であろう。彼らが実際に会える人間関係からモデルを発見することも大切ではある。しかし、現代人の「経験の貧困化」は深刻である。であればこそ、乏しい経験であってもその意味を深め広げるために、そのためのモデルを、歴史を潜り抜けた叡智に、あるいはそれをかみ砕いて現代において語り直している言葉に、また現代に生きてはいても実際には会えない、思慮深く感受性の研ぎ澄まされた人々によって語られた質の高い文章にも求め、学生に提示するだけでなく解釈へと巻き込んでいくことが、今日の大学教育に最も求められていることのように私は思っている。

まして、「正しい」教育の在り方が一義的に固定化できない現代の価値不確定時代にあって、教職課程で教員を目指す学生にとっては、このモデル喪失状況は切実であろう。自分の教育観を育てることもなく、いきなり法令や指導要領などで語られる固い一般的な概念枠に、自分の教育観を回収させてしまうのではなく、より多様で柔軟な、しかしそれでいてそれぞれに練られた個別的な教育観に触れ、個々の学生が、まず自前の教育観を相対化させる必要がある。そのうえで、教育の文脈依存性に気づくとともに、教育への問いを深め成長させることが大切である。そのために、様々な側面から教育の意味について考えさせるような、複数の良書を読むという機会は、ますます重要になっていると思う。

教育を語る言葉を洗練させたいという願い

ところで、今日、教育において生じた問題の現状分析と処理を語る言葉は、統計上の分析的な概念や精神病理学の用語などが支配的であり、ともすればそのことが教育に還元主義(短絡的

にその問題の意味を一義的に決定し、他の可能性を排除する傾向)を招きこんでいる。そして、困ったことにこの類の言葉は学校教育に浸透する官僚主義と共鳴し合い、教育の現場から多元的に意味が発現する契機を隠蔽している。真理探究の道筋を議論する学問論の領域では、近代合理主義の一面性とその淵源である近代科学の論理の限界が指摘されてもはや久しいが、今日、教育研究においても、「科学的」な方法や技術なるものへの盲目的信仰、現状認識のための因果論的・病理主義的な解釈法が、ある種の「つくられた物語」(フィクション)を生み出すに過ぎないことが露呈している。そもそも、私たち人間は「真実」を実体化して手で掴むことなどできるはずもなく、科学的「説明」も一つの解釈に過ぎない。私たちにできるのは、それぞれの視点から語られたことを交差させ、相互主観的により洗練された言葉として絶えず語り直して、「真実」を手探ることぐらいである。「現実」というものは、複数の主観から語り出され、相互主観的に言語によって構成されるものである。

したがって、私たちの教育観が、できるだけ偏った先入観に陥らないためにむしろ必要なのは、より洗練され、練り上げられた生きた言葉の体系、すなわち、それぞれの読者によって多義的な解釈が可能となり、考え方や生き方の一つのモデルとなるような良質の書物を媒介にして、またこれをめぐる他者との話し合いを通して、自分の言葉を洗練させることである。私自身が生来の口下手であり、子ども時代から必ずしも熱心な読書家であったわけでもないのに、早く確実な読書ができない、話す際にすぐに適切な言葉を紡ぎだせないことにコンプレックスを感じて育ってきた。それだけに、以上のことを学生に向けて行うことの必要性も切実に感じるし、何よりこれまでのこのセミナーは、自分にとっても、とてもいい刺激になっているのである。

当初、たち上げに際して、「世話人」の2人で話し合った際、3つのことを確認し合ったと記憶している。まず、このセミナーは、まずは同僚相互で学び合いたい者が集まり、自主的に実施する会であるから、当然ながら、決して参加を義務づけたり、強制する性格のものにはしないということ。したがって、たとえ、将来的に参加者が一定数見込まれる状況になったとしても、FDなどの大学の業務に回収されることのない方が、むしろこのセミナーの性格を保っていくうえで大切であるということ。つまりは、制度の隙間で、意味ある学び合いの空間と時間を確保するのが主旨であるということである。第2に、学生に紹介したい本、同僚に紹介したい本を取り上げ、その理由を語る中で、紹介者自身の教育観や人間観がそこに醸し出される

わけであるから、そのことによって、お互いが、価値観の葛藤や共感を経験することこそが、このセミナーの最大の目的であり、基本的には、それ以上の成果は求めないということ。しかしながら、第3に、あくまでもその蓄積の結果として、将来的に、学生に推薦できる良書の選定ができるようになれば、願ったりかなったりであり、機が熟すれば、その結果はどうあれ、教務委員会等を通じて提案することも視野に入れようということであった。

けれども、私自身としては、当面はそのつど本を読み、意見を交換し合う、その時間を楽しみたい、という気持ちで続けていこうと思っている。(岡本)

3. 大学教員の「同僚性」構築の試みとして

もう一人の「世話人」(富岡)がなぜ「教員間で学び合う」活動としてブックレビュー・セミナーを考えたのかについても記録しておきたい。

教師同士が学び合う「同僚性」

これまでに合計1万回以上の授業観察を行いながら、「学びの共同体」として学校を再生させることを提言してきた教育学者の佐藤学は、次のように教師同士が学び合う「同僚性」の必要性を述べている。

教師が専門家として成長するうえで、学校内の授業研究を活性化させる以上に有効な方法はない。21世紀の教師は「教える専門家 (teaching profession)」である以上に「学びの専門家 (learning profession)」でなければならない。そのためにも学校内の授業研究に基づいて教師が専門家として学び育ち合う「同僚性 (collegiality)」をすべての学校に構築する必要がある。

(佐藤学『教師花伝書—専門家として成長するために』小学館、2009年、177頁)

佐藤が述べるような教師間の「同僚性」が豊かな学校では、年間100回を超える授業の事例研究会が校内で組織され、すべての教師が教室を開き合い、相互に授業を公開し合って学び合っているという。(同前掲書、178頁)

ちなみに、佐藤の提唱する、教師同士が学び合うような校内の授業研究会とは、一般的な授業研究のように教材、授業展開、発問・指示などの「教え方」を中心に検討するものではなく、

子どもの学びと教師の対応こそが検討の中心課題になるという（佐藤学『授業を変える学校が変わる』小学館、2000年、88頁）。つまり、「教師の教え方」を観察と批評の中心として「よい授業」「悪い授業」というように「評価」するのではなく、「子どもの学びの事実」（どこで学びが成立し、どこで学びがつまづいたのか）から省察することで、教師が専門家として学び合うような校内研修が可能となるとしている（前掲『教師花伝書』、188頁）。

こうした佐藤の提言に応じて学校改革を実施した神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校での授業研究会では、「授業の上手、下手は問わない」ことをモットーに実施されていたという（大瀬敏明『学校を変える 浜之郷小学校の5年間』小学館、2003年）。

こうした近年の学校改革の実際については今後詳しく検証していく必要があると感じているが、私自身率直に言えば、こうした改革の試みに刺激を受けていることも確かである。一方、自らの職場である大学のFD活動を顧みると、ピア・レビューや授業評価アンケートにおいては、授業での「教え方」の巧拙が主に問われており、学生の「学びの事実」についての深い省察は、あまり行われていないのではないかと思われる。また数値化された授業アンケート結果だけがその授業の巧拙を比較する「評価」基準として教員評価にも利用される方向にある中では、授業改善に関して大学教員同士が率直に語り合うことは一層難しくなっていくことも危惧される。

大学教員間での自主的な学び合い

ただし、始まったばかりのFD活動に対して一足飛びに「評価から省察へ」などとスローガンだけ振り回してみても無理があるだろう。管見では、「学びの事実」についての省察という授業研究の手法が大学においてどのように実現できるかという点については、まだ全国的にもほとんど検討されていない状況である。

まず必要なのは、大学教員が相互に本気になって学び合うような土壌を作ることであろう。そして、そのためには、大学の特色である「研究と教育の統一」という理念を生かすことが有効なのではないかと思われる。

またこうした「学び合い」は、どんなによいことであっても、大学教員間の共通理解のないところに、いきなり制度的に開始しても成功しないだろう。研究と教育の両面に関わるような「学び合い」が参加自由の自主的活動として継続し、定着していくことが、「学び合い」による「同僚性」の基盤となっていくのではないかと思われる。

以上のように考えると、「教職課程の学生にどのような本を推薦したらよいか」を話し合うブックレビュー・セミナーを自主的に行うことは、大学教員が各自の研究上の問題意識を大切にしながら学生の教育に関係することについて学び合う活動、つまり研究と教育の両面にわたる専門家同士の「学び合い」による「同僚性」構築の試みの第一歩になるのではないだろうか。

以上のような世話人の一人(富岡)の考えは、第1回ブックレビュー・セミナーの場でも述べたが、当日の参加者で一致したものではない。また、岡本氏の文章と比べても、重点の置き方が微妙に異なっていることも確かであろう。しかし、世話人2名の見解の共通部分と相違点も含めて、「教職教育部内のブックレビュー・セミナーがどのような目的で始まったのか」についての記録として公開されたかたちで残しておくことで、今後、この種の取り組みについて議論される際の資料の一つになることを期待したい。

(富岡)